



「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 29 年 4 月 13 日

所属部局・職	霊長類研究所・博士課程学生
氏名	瀧山拓哉

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)	
瀬戸臨海実験所・京都市動物園・生態学研究センター・霊長類研究所・日本モンキーセンター	
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)	
インターラボ	
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)	
平成 26 年 4 月 4 日 ~ 平成 26 年 4 月 9 日 (6 日間)	
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)	
理学研究科生物科学専攻	
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)	
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。	
京都大学理学研究科では、吉田キャンパスや各研究施設において、ミクロ、マクロを問わず多様な研究が行われている。理学研究科に入学してすぐのこの時期にどの研究所でどのような研究が行われているのかを知り、理学研究についての理解を深めるために、6日間かけて、各施設を見学した。	
(日程) 4月4日 オリエンテーション 懇親会(京都泊) 4月5日 瀬戸臨海実験所(白浜泊) 4月6日 瀬戸臨海実験所(京都泊) 4月7日 入学式のため休み 4月8日 京都市動物園・生態学研究センター 4月9日 霊長類研究所・日本モンキーセンター	
・瀬戸臨海実験所(4月5日-6日) 滞在時間も最も長く十分に見学することができた。 初日には教員による研究内容の講義と、各研究施設の案内があった。二日目にはバックヤードを含めて水族館の見学を行った。特に水族館のバックヤードでは、飼育していた甲殻類の殻や脱皮殻について説明していただき、飼育している生物の性質に応じて水の入れ方が異なっていることなど細かい工夫も教えていただくことができた。どの先生も、自分が研究している生き物をどれほど愛しているかということが伝わってきて、聞いている側も楽しい気持ちになった。「研究を行う上で、いかに専門分野が遠い人に興味を持ってもらうか」という問題は非常に重要な問題だと思う。今回の滞在を通じて、そういった姿勢も学ぶことができた。	
	
図1バックヤードにて、巨大水槽を上から覗く	図2バックヤードを解説くださる朝倉所長

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

・京都市動物園(4月8日)

あいにくの雨模様になってしまったが、屋外スペースも含めて田中先生、山梨先生に動物園を案内していただいた。展示室ではゾウの頭蓋骨などが展示されており、田中先生が「骨を見て、動き方を見れば、どんなふうに筋肉や筋がついているかをイメージすることができる」とおっしゃっていたのが印象的だった。確かに頭蓋骨を見てから像を観察すると、どのように顔を動かしているのかを少しイメージすることができた。バックヤードでは、先月亡くなったキリンの「キヨミズ」がなくなった際に解剖した話などを聞くことができた。絶滅危惧動物を研究する上で、動物園での死後のサンプルも重要な研究素材となるため、改めて動物園との連携の重要性を感じた。



図3 京都市動物園のゾウ

・生態学研究センター(4月8日)

インターラボのプログラムで訪れる施設のうち、唯一訪れたことがなかった施設だったため、とても楽しみにしていた施設だった。簡単なガイダンスと、研究紹介の後、安定同位体分析装置などの研究設備の見学を行った。理学研究科であれば、簡単な手続きで分析装置を使用することができるという話を教えていただき、機会があればぜひ活用したいと思った。

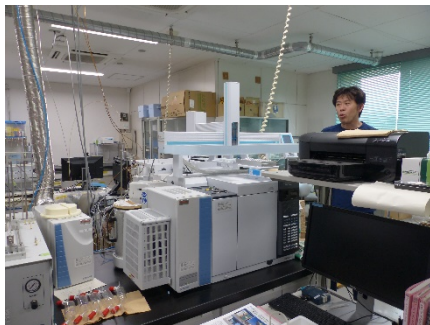


図4 安定同位体分析装置



図5 非常に高価な機械が並んでいた

・霊長類研究所・日本モンキーセンター(4月9日)

霊長類研究所では、ニホンザルの運動場、チンパンジーのスカイラボ、展示室を見学した。ニホンザル飼育群の遺伝的多様性が現時点では野生群の下限と同じだということを教えていただいた。実験個体を繁殖させていくうえでも、飼育群の遺伝的多様性を保つことは非常に重要である。霊長類研究所に所属している身として、ニホンザルの研究を行っていないからと言って他人事することなく今後とも向き合っていきたい。

日本モンキーセンターでは滞在時間は短かったが、8日に訪れた京都市動物園と比較しながら見ることもできたので、非常に楽しかった。リスザルの島やワオオランドでは、リスザルやワオキツネザルを至近距離で観察することができた。またバックヤードでは小瓶半分にもなる寄生虫の標本を見せていただき、それが1頭のマカクから出てきたことなどを教えていただいた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



図6 ワオランドのワオキツネザル



図7 リスザルの島のリスザル

・全体を通じて

学部時代の友人も含めて、様々な分野で研究を行う友人を得ることができたのは大きな収穫だったと思う。特に、普段は遠隔地に所属しているため、京都出張などの機会も通じて、こういった友人たちとコンタクトを取り続け、お互いに研究に関して違った視点からアドバイスできるような関係を作ることができればと思う。また、京都の宿泊先で同室だった Nelson はもちろん、多くの外国人学生とも話すことができ、英語の実戦練習としても大いに役立つ機会だった。まだまだ英語力に関しては修練が必要なので、これからも怠ることなく、練習を続けていきたい。

6. その他 (特記事項など)

本実習は PWS リーディングプログラムの援助を受けて行いました。インターラボを行うにあたって宿泊の手配など、多くのサポートをしてくださった PWS 支援室の左海様、秋山様に深く御礼申し上げます。また、引率してくださった動物学教室の田所先生、森本先生、中村先生、現地で対応してくださった瀬戸臨海研究所の久保田先生、京都市動物園の田中先生、生態学研究センターの谷内先生、霊長類研究所の古市先生、服部先生、日本モンキーセンターの早川先生をはじめ、尽力いただいた生物科学専攻の先生方にこの場をお借りして御礼申し上げます。